

説教「人は何のために生きるか」

イザヤ書 53 章4～5 節、マタイによる福音書 16 章21～25 節（口語訳聖書）

2005.1.30

沖縄バプテスト連盟 ^{まえはら}前原バプテスト教会

沖縄バプテスト連盟結成 50 周年をお迎えになり、心からお祝い申し上げます。^{こんちよう}今朝は前原教会にお招きをいただき、御言葉を語る光栄を与えられました。石垣先生はじめ教会の皆さんの上に、またそのご家族の上に主の喜びがあるよう、主イエスの^{みな}御名により祝福します。

今から50年前、1955年は、私が関東学院大学の中に開設されたキリスト教研究所を卒業した年でありました。当時、沖縄から渡真利文三先生が留学という形で来られていて、一緒に学んだ頃でした。それ以来、神様は沖縄バプテスト連盟を大いに祝福してくださいました。キリスト教研究所はやがて大学神学部となりましたが、その頃に伊波盛次郎先生や玉城先生が、さらに一番最近、日本バプテスト神学校として横浜に新校舎と宿舎が建てられてからは、そこで伊是奈正哉先生と、そして石垣用哲先生が学んでくださいました。そんな親しい関係が続いていることは嬉しく、ありがたいことであります。

今朝は、「人は何のために生きるか」というテーマを掲げてみました。今年の 8 月で、戦後 60 年を迎えます。実は、私にとって、全く新しい人生を始めたのはこの日本の敗戦、無条件降伏を経験してからのことでもあります。少し、その頃にまで^{さかのぼ}遡り、私の貧しい^{あか}証しを交えてお話しすることをお許し願いたいのです。

実は、私は中学校の頃、広島^の江田島にあった海軍兵学校に憧れ、必死で勉強しました。そして、ようやく合格し、江田島で2年4カ月の教育を受けたわけです。しかし、卒業した1945年3月30日、日本海軍は壊滅状態になっていました。沖縄戦においては、沖縄の皆さんが壮烈な戦いの中で数多く死んでゆかれました。内地には想像もつかない苦しみ、悲しみを経験されたことであろう。

私は兵学校を卒業して、呉に、横須賀に、能登半島の港に、^{おおみなと}大湊に、そして敗戦間近には北海道千歳航空隊に転任になり、当時 沖縄を占領していた米軍の B-29 基地に特攻を組んで攻撃しようと、準備を始めていました。いよいよ私にも死ぬ時が来たか、と覚悟していました。

しかし、数日後、意外にも日本無条件降伏を知らせる新聞を見て、驚きました。戦争は終わりました。部隊は解散し、その年の秋頃、私は田舎に帰りました。田舎でも、これからの日本はどうなるのか、これからどうやって生きていくのかと、大変でした。私は海軍に憧れ、必死に勉強して入ったのですが、戦いは終わってしまいました。もはや、軍人は用がなくなりました。

すべてが一変しました。私は海軍将校という誇りを、プライドを持っていましたが、それが一夜明けると、我々職業軍人は国を滅亡に導いた戦争犯罪人に貶められたのです。我々は公職追放になりました。つまり、公の仕事に就いたり、公立学校の先生になったりすることはできなくなりました。

名誉ある軍人が、国を滅亡に導いた戦争犯罪人とされたのです。これは大変なショックですね。しみじみ感じたことは、世の中の人々が持っていた価値観というものはこんなにも脆く、当てにならないものか、ということでした。人が生きていく本当の価値、確かな価値というものはどこにあるのか、ということでした。それまで立派なものと思われていた価値が、世の中がひっくり返ると、塵や芥のように無価値なものになってしまったのです。

私は決心しました。天地がひっくり返っても、世の中がどんなに変わろうとも変わらない価値ある生き方を見つけよう、と。二度とゼロからやり直す必要のない生き方を見つけよう、と。

それは何だろうか。それがはっきりしないでは、これからの人生、二十歳からの人生を本気で生きてはいけない。本当に生きる意味とは何か、変わることはない生き方とは何であるか？これが、私の戦後数年間、問い続けた問いでありました。

私は長野県の伊那の農家の長男でしたから、当然、家を継ぐべき者でありました。私は、土を耕す農業の仕事は小さい時からやらされてきましたし、それが決して無意味でも嫌いでもありませんでした。しかし、そのまま一生、百姓をして過ごすとも思えなかった。もっとほかになすべき仕事があるように思われてなりません。そこで、大学というところに行ってみたら、この私の人生の問いに答えが与えられるのではないかと、思ったのです。

そんな思いで東京に出て、ミッションスクールと言われる大学の一つ、立教大学に入りました。経済学部に入ったのですが、私にとって何が人生の本当の意味なのか、どういう生き方をしたらよいのかという問題、それが私の頭から片時も離れることがありませんでした。

しかし、相談するような人が周りにいなかったため、専ら古本屋に入って、人生の意味を教えてくださいそうな本をあさったものでした。すると、キリスト教に関係した人の書いたものがなにか、私の問いに答えてくれそうに思いました。そんな中、アウグスティヌスの『懺悔録』という書を読みました。また、古今東西の聖人君子と称えられるような有名な人々の教訓や人生訓といったものをまと

めた書物を見つけました。そこには、ガンジー、リンカーン、ジョージ・ワシントン、孔子、孟子、^{なかえとうじゆ}中江藤樹、西郷隆盛、その他多くの人々がおり、その中にキリストの言葉もあったように記憶しております。それで、これらの先達^{せんだつ}の「人生はこのように生きるべきだ」という教えの中にもし共通している真理があれば、私はそれに従って生きていこうと考えたのです。そのようにして、この本を何度も読んだ末に得た結論は、意味ある人生の生き方とは他者のために生きるということでありました。

そして、この真理を私なりに考え、理解しました。

人は誰でも、自分の幸せを求め、やがて良い相手と結婚して、家庭をつくる。それはたしかに、幸せであろう。けれども、それはただ自分が幸せであるだけであって、私以外の人、すなわち他の人にとっては、私という人生が生きようが死のうが何の関わりも意味もないではないか。つまり、自分のためだけに生きる人生というのは、他の人にとっては何の意味もない、ということです。

しかし、もし私が、たとえ一人でもよい、他の人のために生きたことによって「良かった」「ありがたかった」と言われるような生き方ができたとしたら、私の人生はその人にとって意味があったのだ。そのように私は理論づけ、自分に納得したのであります。他者のために生きる。そこに私の生きる意味がある、と。

戦後、私が東京の大学に通いながら、横須賀^{たけやま}の武山にある米軍の進駐軍キャンプ・マッギルで翻訳の仕事（今で言うアルバイト）を見つけて働いたのは、英語をしっかりと身につけたいと思ったからです。また、そのためには英語の聖書を読むといいと聞いて、日本語と英語の聖書を読み比べてみました。

当時、私は、横須賀^{おっぱま}の追浜というところにいる遠藤のお婆さんの家に下宿していました。そして、その家の隣りに住んでおられた宮部さんというクリスチャンの奥様と知り合い、宮部さんから「あなたはミッションスクールに通っているのだから、一度は教会に行かなくちゃだめでしょう」と言われたのでした。近くに、戦後始められた追浜伝道所がありました。そこで、ある日曜日の夜、生まれて初めて教会の門をくぐりました。

その時のお話は、鎌倉雪ノ下教会の松尾牧師先生でした。

その牧師先生のお話の中で「英国の信徒伝道者ジョン・バニヤンという人の『恩寵^{あふ}溢るる記』という本があるが、読むと良い」と言われたことを覚えています。後^{のち}になって知ったのですが、この人こそ、英国バプテストの信徒伝道者でありました。

しかし、彼は当時、英国国教会から「勝手に説教してはならぬ」と咎^{とが}められ、投獄されました。その獄中で書かれたというもう一つの書物『天路^{てんろ}歷程^{れきてい} (The Pilgrim's Progress)』もあまりに有名な書であることを、後^{あと}で知りました。私は、英語の勉強にもなると思って、立教大学へ通う途中、

夏目書房という古本屋でこの書物を買ったのですが、進駐軍のアルバイトで時間に余裕があったので、辞書を引きながら少しずつ読み続けました。

追浜の駅前で待っていると、トラックが来ます。進駐軍で働く人たちは、その荷台に立ったまま乗せられ、通っていました。そんな冬の寒い朝でした。いつものようにトラックに乗って行く途中、心が空しく、そして淋しい思ひになっていました。そして、どんよりと曇った空を見上げていました。

すると、空に十字架が浮かび、その木につけられている人の姿が見えたのです。その人は十字架につけられ、苦しんでいました。私は心の中で問いました。あの人はなぜ、あんな苦しみを受けているのだろうか？ 一体、何のため、誰のためなんだろうか、と。そして、その時、あの人はもしかしたらこの私のために苦しんでいるのではないだろうか、と思ったのです。大胆にもというか、畏れ多いとおうか、その時、あの方はこの私のために苦しんでおられるのではないかとそう思ったんですね。

と、その途端に、何か温かいものがお腹から込み上げてくるのを感じたのです。

外は冷たい風にさらされていましたが、心の中は温かく、武山の先の進駐軍のキャンプに着くまで、その温かさが消えることはありませんでした。その時、私は、このイエスという人は 2,000 年前の遠い昔の人ではなく、今のこの私にとって親しい友人であり、友であると実感したのであります。

そんなことがあって、戦後 3 年目の 1948 年 12 月 23 日、通っていた鎌倉雪ノ下教会 追浜伝道所のクリスマスの夜の礼拝で、松尾造酒蔵牧師から洗礼を受けたのでした。

あとで知ったのですが、その日曜日の朝、国際裁判の結果、東条英機ほか数名に絞首刑が執行されたのであります。

それから、年が明けてしばらく後のこと、下宿のおばさんが、どこから聞いたか知りませんが、近くの関東学院のキャンパスでアメリカの宣教師がバイブルクラスをやっているそうよ、と教えてくれました。

私は英語が好きでしたから、その宣教師の活きた英語に接して どの程度理解できるか、行って聞いてみよう、自分の英語の実力を試してみようと、早速出かけて行きました。

その宣教師はスターリング・ビースという老先生で、ゆっくりと分かりやすい英語で話してくれたので、半分以上、言っておられることが分かりました。

すっかり嬉しくなって、その翌週も、一日も休まず出席しました。そのうえ、朝のバイブルクラスが終わると、関東学院教会の朝の礼拝を告げる鐘が鳴り始めるので、伝道所に引き返さず、鐘の音に誘われるままに関東学院教会の礼拝に入ってしまった。これが、私がバプテスタの教会の群れに

加わるきっかけとなりました。これは、神の不思議なお導きと言うほかありません。ちなみに、ブース先生からは、当時の新しい英語訳の Chicago Translation で教わりました。

やがて、聖書にだんだんと深く親しむようになり、特にマタイ福音書 16 章 24 節の「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」との御言葉に接した時には、驚きました。自分を捨てて、十字架を背負って、私に従ってこい！ というのですから。

なんとという凄^{すご}い、力強いお言葉か。こんなことを言うお方に、今まで出会ったことがない。私はそう感じ、この御言葉に打ちのめされる思いがしました。そして、それまでは漠然と他者のために生きる人生をと決めていた私に、このイエス様に全面的に従うことによってこれからの人生を生きよう、という決断が与えられたのでした。私はかつて、沖縄に突撃して死をと覚悟した命でしたが、これからはイエス様に命を懸けて従っていこう、と心が定まりました。他者のために生きるという使命を与えられました。

こうして、私は戦後 5 年で立教大学を卒業しましたが、一年後に関東学院大学にキリスト教研究所が発足することを知って、さらにもう 1 年、武山の進駐軍でアルバイトを続けました。この間、ジョン・バニヤンの『天路歷程』とブース宣教師から頂いた『旧新約聖書』を、辞書を引きながら完読することができました。聖書は、創世記から始めて 旧約・新約の全体を通して、です。

この後^{のち}、1951 年 4 月に始められたキリスト教研究所に、他の 10 名余りの人たちと共に入学しました。私の場合は、ここで 4 年間学ぶことになりました。というのも、3 年目になろうとする 1953 年の春、バプテストの主事の菅谷先生から、「長野県の大町にあるバプテストの教会で、牧師が転任になった。人がいないので、大町教会で働いてはどうか」と勧められたからです。こうして、学半ばで丸 13 カ月、牧師代理として、伝道・牧会のご奉仕をする得がたい経験を与えられました。

そして、1954 年 4 月 18 日のイースターに、他の 3 名の受洗志願者と共に、木崎湖において、関東学院教会の中居^{たかし}京牧師よりバプテストを受けました。以来、バプテストとして、今日^{こんにち}のバプテスト同盟の教職の道^{みち}を辿ることになりました。これが、戦後 10 年間の歩みでありました。

イエス様はマタイ 11 章 28 節以下で、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と教えておられます。つまり、イエス様が天秤棒^{てんびんぼう}の片方を、しかも重いところ^{かさ}を担いでくださるので、もう一方の私の方はとても軽く、担っていけるのです。

また、イエス様のもう一つのお名前は「インマヌエル（神、我らと共にいます）」です。

聖アウグスティヌスが『懺悔録』の初めのところで「イエス・キリストにある喜びに溢れている」と書いていますが、彼がイエス・キリストにあつてどんな喜びを見出したのかを知ろうと、私は『懺悔録』を読みました。ですが、当時はよく分からなかったことを思い出します。しかし、今は、十字架の許でイエス様と共にあることの喜びが分かるように思います。

イエス様は私たちの犯したすべての罪・過ちの一切をご自分の背に背負って、十字架上で私たちの罪の身代わりとなられ、私たちを罪と悪から解放してくださいました。そして、十字架のイエス様は今も、他者のために・他者と共に生きる喜びの生き方を教えてくださっています。（イザヤ書 53 章 4～5 節 参照）

以上、私の戦後初期の生涯を通じて、イエス様が私に働いてくださった証しであります。イエス様は私と共に、またあなたがたと共に歩いてくださいます。この信仰に立って、イエス様を誉め称えつつ、日々喜んで仕えてまいりましょう。